

大新书局授权

新試験対応

新日能测验 全真模拟题集

N1

(日本) 国书日本語学校 · 青山丰 · 青山美佳 编

CDつき



- ❖ 新日语能力测验 N1 全真模拟题
 - ❖ 对应全新“语言知识(文字、词汇、语法) · 读解”
和“听解”两大考试科目
- 佳考前冲刺辅助用书
- 中日文“新日语能力测验”介绍

南开大学出版社
天津电子出版社

新試験対応

N1

新日能测验 全真模拟题集

日本一线专家倾力打造

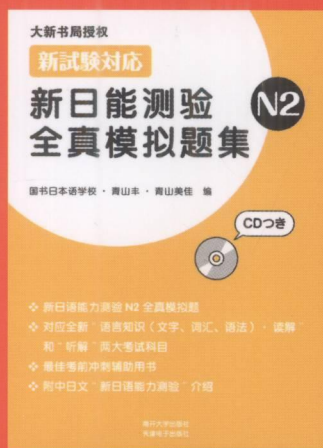
- 参透新 JLPT 指南精髓
- 针对性指导答题技巧
- 各科目题型全面覆盖

新試験対応

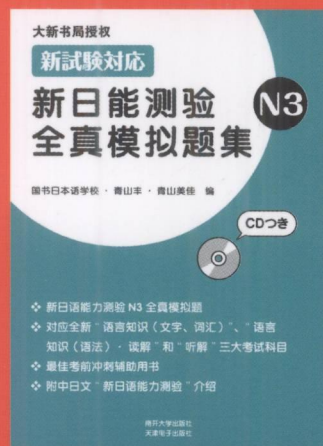
新日能测验 全真模拟试题集

N1

系列丛书



新日能测验
全真模拟试题集 N2



新日能测验
全真模拟试题集 N3

作者紹介

●青山豊【あおやま ゆたか】

大阪外国語大学（現・大阪大学外国語学部）英語科卒。日本語教育能力検定試験合格。高校英語教師、民間国際交流団体職員、出版社勤務、『新版 日本語教育事典』（大修館書店、2005）編集補佐、日本語教師養成講座担当などを経て、日本語教師に。共著書に『記述問題テーマ100』（凡人社、2002）がある。

●青山美佳【あおやま みか】

成城大学文芸学部卒。日本語教師養成講座修了後、日本語教育能力検定試験合格。出版社勤務などを経て、フリーランス編集者・ライターに。共著に『新出題基準対応 日本語能力試験1級聴解』『同2級聴解』（韓国・時事日本語社、2006）、『精準予測日能測驗1級 聴解』（台湾・大新書局、2007）、『マンガで学ぶ日本語表現と日本文化ー多辺田家が行く！』（アルク、2009）。編集ユニット「創作集団にほんご」結成、読解教材『中上級のにほんご』月刊発行。2007年、青山豊と「青山組（aoyamagumi.cocolog-nifty.com/blog）」を結成。

協作単位

●英語翻訳

Randall Chamberlain

●中国語・韓国語翻訳

李明華

●イラスト

花色木綿

●CD制作

高速録音株式会社

財団法人 英語教育協議会(ELEC)

●ナレーター

山中一徳

久末絹代

新試験対応

新日能测验 全真模拟题集

N1

国书日本語学校・青山豊・青山美佳 编

本著作物由国书刊行会、大新书局授权出版

天津市版权局著作权合同登记号：图字 02-2010-68

图书在版编目 (CIP) 数据

新日能测验全真模拟题集. N1 / (日) 青山丰, (日)

青山美佳编. —天津：南开大学出版社，2010.6

ISBN 978-7-310-03437-6

I. ①新… II. ①青… ②青… III. ①日语 - 水平考
试 - 习题 IV. ①H369.6

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2010) 第 101805 号

版权所有 侵权必究

南开大学出版社、天津电子出版社出版发行

出版人：肖占鹏
于志坚

地址：天津市南开区卫津路94号 邮政编码：300071

天津市南开区长实道19号 邮政编码：300191

营销部电话：(022) 23678808 营销部传真：(022) 23678809

*

珠海市壹朗印刷有限公司印刷

全国各地新华书店经销

*

2010年 6月 第1版 2010年 11月 第2次印刷

787×1092 毫米 16开本 8.5印张 127.5千字

定价：24.00元 (含1张光盘)

如遇图书印装质量问题，请与本社营销部联系调换，电话：(022) 23678808

まえがき

全世界で56万人（2008年）が受験する日本語能力試験が2010年7月、新しい試験に生まれ変わります。

「新しい日本語能力試験」は、日本語を学んだり使ったりする幅広い人を対象として、その日本語能力を測定する試験であることは、旧試験と変わりませんが、日本語の知識だけに偏るのではなく、それを実際に使ってコミュニケーションできる能力を測ることを重視するものになります。問題内容も、これを反映して大きく変わります。

この予想問題集は、2009年8月に改訂内容をまとめ公表された「新しい『日本語能力試験』ガイドブック」と「新しい『日本語能力試験』問題例集」をもとに、どのような問題が考えられるのか、試みに作成したものです。限られた例題から予想して作成したため、必ずこの問題が出題される、というものではありませんが、まずはいろいろな形式の問題に当たっておくのも無駄にはならないのではないかと、という思いで作問しました。すでに第1回試験に向けて勉強を始めている学習者の方にもいると思います。少しでも、その準備に役立てば幸いです。

* * *

本書は2部構成になっており、第1部は「言語知識（文字・語彙・文法）・読解」、第2部は「聴解」です。「読解」の問題では、原文に読みがなをつけたり、注を加えた文章があります。「聴解」では、「ガイドブック」では問題の指示文も音声が入っていますが、本書では省略しています。

2010年1月
編著者一同

目次

まえがき

新しい日本語能力試験に関して 5

第1部 言語知識（文字・語彙・文法）・読解 25

- 問題1 漢字読み
- 問題2 文脈規定
- 問題3 言い換え類義
- 問題4 用法
- 問題5 文の文法1：文法形式の判断
- 問題6 文の文法2：文の組み立て
- 問題7 文章の文法
- 問題8 内容理解：短文
- 問題9 内容理解：中文
- 問題10 内容理解：長文
- 問題11 統合理解
- 問題12 主張理解
- 問題13 情報検索

第2部 聴解 77

- 問題1 課題理解
- 問題2 ポイント理解
- 問題3 概要理解
- 問題4 即時応答
- 問題5 統合理解

解答 103

聴解問題スクリプト 107



新しい日本語能力試験に関して

新しい日本語能力試験とは

2010年7月から、「新しい日本語能力試験」（以下、新試験）が実施されます。新試験はこれまでと同様、原則として日本語を母語としない人を対象に、日本語の能力を測定し認定することを目的としています。

2009年までの日本語能力試験（以下、旧試験）では、言語知識を問う問題が配点の半分を占めていましたが、新試験は、従来の文法や文字・語彙などの言語知識とともに、それを実際に運用してコミュニケーションをし、課題を遂行する能力があるかどうか、ということをも測る試験に変わります。

2009年7月に、主催団体である独立行政法人国際交流基金と財団法人日本国際教育支援協会から、『新しい「日本語能力試験」ガイドブック』（以下、ガイドブック）が公表されました。改定のポイント、新しい試験の概要などが掲載されています。そのガイドブックをもとに、新試験がどのように変わるのか、N1～N3を中心に見ていきましょう。大きく変わるポイントとして、次の5点が挙げられます。

1 レベルが4段階から5段階になる

旧試験は4段階（1級～4級）に分かれていますが、これが新試験では5段階（N1～N5）になります。旧試験の2級と3級の間に「N3」というレベルが新しく設けられます。これは「3級に合格したが、なかなか2級に合格できない」という声が多く、それに対応して作られた、ということです。

旧試験と新試験のレベル対応は以下の通りです。

N1→旧試験の1級よりやや高めのレベル（合格ラインは旧試験とほぼ同じ）。

N2→旧試験の2級とほぼ同じレベル。

N3→新設レベル。旧試験の2級と3級の間のレベル。

N4→旧試験の3級とほぼ同じレベル。

N5→旧試験の4級とほぼ同じレベル。

2 試験科目と試験時間が変わる

試験科目が以下のように変わります。

N1とN2は、「言語知識（文字・語彙・文法）・読解」と「聴解」の2科目。

N3、N4、N5は、「言語知識（文字・語彙）」「言語知識（文法）・読解」「聴解」の3科目。

試験時間はN1では「言語知識・読解」が110分、「聴解」が60分。N2では「言語知識・読解」が105分、「聴解」が50分。N3では「言語知識（文字・語彙）」が30分、「言語知識（文法）・読解」が70分、「聴解」が40分です。

N4は「言語知識（文字・語彙）」30分、「言語知識（文法）・読解」60分、「聴解」35分、N5は「言語知識（文字・語彙）」25分、「言語知識（文法）・読解」50分、「聴解」30分となります。

3 合否判定は、総合得点と得点区分の基準点によって行われる

旧試験では、総合得点で合否が判定されていましたが、新試験では、総合得点と各得点区分の基準点の2つで合否判定が行われます。基準点に達していない得点区分が1つでもあると、不合格になります。得点区分に基準点を設けたのは、学習者の日本語能力を総合的に判断するため、ということです。

得点区分は、N1、N2、N3の場合、「言語知識（文字・語彙・文法）」、「読解」「聴解」の3区分になり、各区分の得点の範囲は0～60、総合得点の範囲は0～180です。

N1、N2では、試験科目の「言語知識（文字・語彙・文法）・読解」が得点区分の「言語知識（文字・語彙・文法）」と「読解」にあたり、「聴解」が「聴解」にあたります。

N3では試験科目の「言語知識（文字・語彙）」が得点区分の「言語知識（文字・語彙・文法）」、「言語知識（文法）・読解」が得点区分の「読解」「聴解」にあたります。

N1、N2、N3では、学習段階の特徴から、「言語知識」と「読解」は別の能力として測定されます。言語知識を運用して課題を遂行する能力は、読解、そして聴解で、より現実に近い形で発揮されるため、それを試験問題に反映させやすくするためです。現実に即したコミュニケーション力をバランスよく付ける学習が必要になります。

ただし、基準点が何点になるかについては2010年に決定する、ということです。

4 得点等化が行われる

異なる時期に実施される試験は、出題問題が異なるため、試験の難易度にどうしても変動が生じます。新試験では、異なる時期に試験を受けても、試験の難易度にかかわらず、実力が同じ場合は同じ得点になるよう「等化」が行われます。異なる時期に受けた試験の結果を共通の尺度上の得点で表し、比較できるようにする、ということです。

5 「日本語能力試験Can-doリスト」が提供される

試験に合格しても、実際に日本語を使ってどんなことができるのかはわかりません。そこで、新試験では、レベルごとに、そのレベルに合格した人は日本語を使って具体的にどんなことができると考えているかという例を示したリスト（Can-doリスト）が提供される予定です。例えば「書く：感謝や謝罪、感情を伝える手紙やメールが書ける」「話す：アルバイトや仕事の面接などで、希望や経験を詳しく述べるができる」といった形で表されます。

ただし、このリストはまだ公表されておらず、2010年度中に提供される、とされています。

◆ 新試験の内容について

ここでは、新試験の構成について、見てみましょう。N1は以下の通りです。

● 言語知識・読解

文字・語彙

漢字読み6問 文脈規定7問 言い換え類義6問 用法6問

文法

文の文法1（文法形式の判断）10問 文の文法2（文の組み立て）5問

文章の文法5問

読解

内容理解（短文）4問 内容理解（中文）9問 内容理解（長文）4問

統合理解3問 主張理解（長文）4問 情報検索2問

● 聴解

課題理解6問 ポイント理解7問 概要理解6問 即時応答14問 統合理解4問

◆ 新試験で測定される知識・能力はどのようなものか

冒頭にも書きましたが、新試験は、「文法や文字・語彙などの言語知識とともに、それを運用して実際に課題を遂行するコミュニケーション能力があるかどうか」を測る試験だとされています。

では、ここでいう「課題」とは、具体的にはどのようなことを指しているのでしょうか

か。ガイドブックによると、新試験では、学習者が現在または将来、日本語を使うと予想される状況を「目標言語使用領域（以下、領域）」と設定し、この領域で遂行する頻度が高いと考えられる「目標言語使用課題（以下、課題）」を選んで出題する、とされています。また、課題の課せられる「領域」は、旧試験の応募者の所属や受験目的などのアンケート結果をもとに、「学校」「就業」「生活」の3つを手がかりに推測する、ということです。

つまり、各領域の特徴を持った幅広い問題が出題されるので、レベルによって比重は異なるものの、偏りなく、さまざまな場面で使われる日本語を身につけておくことが求められるといえるでしょう。

それでは、その課題がどのような形で出題されるのか、以下、具体的に試験科目の分類にしたがって見ていきましょう。

1 言語知識（文字・語彙）

ガイドブックでは、「文字・語彙」の知識は、「どのぐらいの数の語を知っているか」「ある語についてどのぐらい詳しく知っているか」という2つの観点からとらえられる、と書かれています。

「ある語についてどのぐらい詳しく知っているか」は「語の形式」「意味」「用法」の3要素から成り立っていると、記載されています。旧試験の「文字・語彙」では、「認定基準」に示されている語数を習得していることを前提に、この3要素を測定する問題が出題されていました。新試験でも同様に、この3要素を測定する試験になるということです。

「文字・語彙」は、6つの大問、「漢字読み」「表記」「語形成」「文脈規定」「言い換え類義」「用法」が設けられます。課題を遂行するための言語コミュニケーション能力を支える言語知識を、語の形式、意味、用法の3面から測定します。

「語の形式に関する知識を測る問題」

「漢字読み」「表記」「語形成」の3つの大問が設けられます。「漢字読み」は漢字で書かれた語の読み方を問う問題、「表記」はひらがなで書かれた語の漢字表記やカタカナ表記（N5のみ）を問う問題、そして「語形成」は派生語や複合語の知識を問う問題です。語形成はN2だけで設定されている問題ですが、N1、N3でも、ほかの問題の中で問われる場合もあるということです。なお、N1では「語形成」とともに「表記」の大問も

しゅつだい
出題されません。

「語の意味に関する知識を測る問題」

「文脈規定」「言い換え類義」の2つの大問が設けられます。「文脈規定」は、文中に1つ空欄が設けられ、そこに入るのに最もふさわしい語を4つの選択枝（注）から選ぶ、という問題です。「言い換え類義」は、出題される語を言い換えた場合、一番意味が近い語や表現を4つの選択枝から選ぶ問題です。「文脈規定」と「言い換え類義」は、N1～N5すべてのレベルで出題されます。

注：本書では、ガイドブックにならない、「選択肢」ではなく「選択枝」を使います。

「語の用法に関する知識を測る問題」

「用法」という大問が1つ設けられます。語が文の中で、どのように使われるのが正しいのか、4つの選択枝から選びます。品詞やその語がどういう語と一緒に使われるのか、などの観点から、語の用法に関する知識を問う問題です。N1～N4で出題されます。

2 言語知識（文法）

ガイドブックでは、「文法」の知識は、「文法形式とその意味用法に関する知識」と「テキスト性に関する知識」の2つの観点からとらえる、と書かれています。

文を作る場合、語だけを並べても意味の通じる文にはなりません。語を活用させたり助詞を適宜使ったりして、語と語が自然に結びつくようにする必要があります。また、文を並べただけでも、ひとまとまりの意味を持った文章にはなりません。まとまった文章にするためには、適直接続詞を使ったり、視点を統一するといった知識も必要です。これらを測るのが文法の問題です。

大問は、「文の文法1（文法形式の判断）」「文の文法2（文の組み立て）」「文章の文法」の3つが設定されます。すべてのレベルで出題されます。

「文法形式とその意味用法に関する知識を測る問題」

「文の文法1（文法形式の判断）」「文の文法2（文の組み立て）」という2つの大問が設けられます。

「文の文法1（文法形式の判断）」は、「文の内容に合った文法形式かどうかを判断することができるか」を問う問題です。問題の形式は、一文に空欄を設け、そこに当ては

まるものとしてふさわしいものを4つの選択枝から選ぶ、というものです。

「文の文法2（文の組み立て）」は、「統語的に正しく、かつ意味がある文を組み立てることができるか」を問う問題です。問題形式は、一文の中で、4つの選択枝で示された語を並べ替えて、正しい順番にしたときに、指定された位置に当てはまる語を答える、というものです。

「テキスト性に関する知識を測る問題」

「文章の文法」という大問が設けられます。「文章の流れに合った文かどうかを判断することができるか」を問う問題です。問題形式は、あるまとまった文章に空欄を設け、そこにふさわしい語や表現を4つの選択枝から選ぶ、というものです。

3 読解

問題全体の構成において、読解はN1～N3レベルでは、その比率が旧試験よりも高くなります。ガイドブックによると、読解は「どのようなテキストから」「どのように情報を得るか」という2つの観点から課題を設定する、とされています。

出題されるテキストのテーマや内容はさまざまで、学習に関するもの、現実の生活で目にふれる実用的なもの、仕事に関するもの、などが扱われます。テキストの種類としては、説明文、意見文、評論やエッセイ、日常生活で目にする連絡や案内、仕事で使われる文書などが挙げられます。長さはレベルに応じて、短文、中文、長文の区分けがされるということです。

ガイドブックによると、どのように情報を得るかは、次の4つの読み方のタイプを元に問題を設定し、そのうちの1つの読み方、あるいは複数の読み方を求める問題が出題されるということです。

- A 全体を迅速に読む
- B 部分を迅速に読む
- C 全体を注意深く読む
- D 部分を注意深く読む

大問はレベルによって異なります。

「テキストの内容（部分）を的確に理解する問題」

「内容理解」という大問で、全レベルで出題されます。ガイドブックによると、「言語知識を利用してテキストの細かい部分を注意深く読んでの確に理解できるかどうかを重視」した問題だということです。テキストに書かれている事実関係、理由や原因の把握などを問う問題が出題されます。Dの「部分を注意深く読む」読み方を求める問題です。

「テキストの内容（より広い部分・全体）を的確に理解する問題」

これも「内容理解」という大問で、N1～N3のレベルで出題されます。ガイドブックでは、「テキスト全体像を的確に把握し、大意を取ったり、キーワードを押さえたり、どのような論理で展開しているかをとらえたりする」といった能力を測る問題とされています。読み方のAとC「全体を迅速に／注意深く読む」読み方を求める問題です。

またN1、N2では、「主張理解」という大問があり、論説文などを読み、「テキスト全体として伝えようとしている主張・意見を読み取る」ことができるかどうかを問う問題も出題されます。

「関連がある複数のテキストを比較したり統合したりする問題」

「統合理解」という大問で、N1、N2レベルで出題されます。ガイドブックによると「同じ話題について違う立場から書かれた2つのテキストについて、その違いや同じところが理解できるか」を問うとされています。読み方のAとD「全体を迅速に／部分を注意深く読む」読み方を求める問題です。

「お知らせ、パンフレットなどから必要な情報を検索する問題」

「情報検索」という大問で、全レベルで出題されます。ガイドブックには「テキストの中から目的や課題に合わせて必要な情報を採し出すことに重点を置いた」問題と書かれています。読み方のAとB「全体を／部分を迅速に読む」読み方を求める問題です。

4 聴解

今回の改訂で、聴解は大きく変わります。Ⅲ試験より問題数が増え、試験全体における聴解の比重は重くなります。Ⅱ試験では絵のある問題Ⅰと選択枝が音声で示される問題Ⅱに分かれていましたが、新試験ではどんな力を測るか、その内容によって大

きく2つの問題に分かれています。1つは「内容が理解できるかどうかを問う問題」、もう1つは「即時的な処理ができるかどうかを問う問題」の2つです。

内容が理解できるかどうかを問う問題は、「課題理解」「ポイント理解」「概要理解」「統合理解」の4つが出題されます。また即時的な処理ができるかどうかを問うものとしては「即時応答」「発話表現」という問題が出題されますが、レベルによって出題される問題が違います。

新試験は、現実のコミュニケーションに必要な聴解能力があるかどうかを測るため、問題はより現実の課題に近いものにする、とガイドブックではうたわれています。現実のコミュニケーションにおいては、聞くべきポイントを絞って聞いたり、推測やメモをとりながら聞くということもあります。そういった力も試される試験になる、と言えるでしょう。また、イラストのある問題も出題されますが、これまでと違い、できるだけ実際の生活で見えるようなものがテーマとして取り上げられるということです。

以下、問題ごとに詳しく見ていきましょう。

「内容が理解できるかどうかを問う問題」

①課題理解

ガイドブックには、「ある場面で、具体的な課題の解決に必要な情報を聞き取り、適切な行動が選択できるかどうかを問う問題」と書かれています。場面設定と質問が音声で示された後、指示や助言などを行っている会話を聞いて、次にどのような行動をとるのがふさわしいか、選択枝から選ぶ、という形式です。選択枝は、文字で示される問題とイラストで示される問題があります。イラストはできるだけ、現実の生活で見えるような形で示されます。「課題理解」は全レベルで出題されます。

質問形式は、ガイドブックの例題では、「女の人はこの後、何をしなければなりませんか (N1)」「男の人は箱に何を入れますか (N2)」「女の人は、明日、何時までにホテルを出ますか (N3)」など。この問題集では、こうした問題に加え、話し合いながら自分の担当すべきことを把握する問題、やるべき順番を把握する問題、してはいけないことを把握する問題なども作成しました。また、難易度は高いですがN1では、複数のやるべきことを把握する問題も作成しました。

②ポイント理解

ガイドブックには「内容のポイントを絞って聞くことができるかどうかを問う問題」と書かれています。場面設定とあらかじめ聞き取らなければならないポイントが示され、